

前川貞次郎著

## フランス革命史研究

——史学史的考察——

著者はまず、まえがきの中で、わが国における西洋史研究のあり方について深い疑義を提出される。日本西洋史学は、所詮西洋の学者の糟粕をなめるにすぎないのではあるまいか。そしてそれは史料と理論との不統一という日本における西洋史研究では到底免れ難い宿命的制約として、遂に且つ常に、日本史や

中国史研究の本格的歴史学には及びえないものと諦めるほかないのではあるまいかとも問われる。これは単に日本西洋史学の存在理由にも関する本質の問題であり、西洋史学徒の悉くが学的生命を賭けて対決すべき先決問題であるが、著者はその永き苦闘を経て、歴史の研究こそかかる不信、懷疑から免れうる第一のものであるとの確信を得、それをフランス革命研究史への究明によつて立証されようとした。まえがきが——西洋史研究者としての反省——の、また本書の表題も——史学史的考察——の副題をもつ所以であるが、その構成は次のようなものである。

先ず巻頭は、序章フランス革命研究史の意義と方法で飾られているが、ここで著者は、フランス革命はいうまでもなく世界史上の重要事件であるが、何よりもフランス人に起つた事件であり、今日もなおフランス人の中に生きつづけている事件である。従つてフランスの歴史家たちの関心もとくにこれに集中し、フランスの歴史家でフランス革命を研究し、叙述しなかつたすぐれた歴史家は稀であるといつても決していいすぎではない。かかる十九世紀フランス史学史が集中的に表現されているフランス革命研究史の意義は(一)学説史——研究発達の意義、(二)史学史的意義、(三)歴史哲学(理論)的意義に三大別してその何れにも認められるけれども、第一、第三の問題にも若干触れつつ、ここでは主として十九世紀以後のフランス史学の中核として、とくにフランス史学の特徴、あるいは歴史学とフランスの現実との結びつきを明かにせんとする第二の意義に重点をおき、且つ解明の手がかりとしての研究対象を、特殊の専門研究なり、総合的一般的な叙述、すなわち「フランス革命史」とよばれる概説的叙述に選び、傍ら十九世紀フランス史を大きく政治史的に区分し

て、各時期の代表的な革命史家の著作を中心に革命史研究発展のあとづけを試みようとする。本書に対する基本方針を述べている。第一章革命およびナポレオン時代——初期の革命史家たち——は、初期の革命史家としてバルナーヴなどがあげられているが、革命期はその反歴史性の故に、またナポレオン自体、自ら創つた歴史を正当化し、荣誉化することにのみ徒らに急のため、いわば歴史の不毛時代といえる。これに反し、第二章王政復古時代——政治論争と革命史——でとりあげられているこの時期は、十九世紀フランス史学史上最初の「洪水」期ともいえる。ロマンティスムノスタルジアの精神と激烈な政治抗争、およびそれと結びついた歴史論争、これがその原因と考えられるが、モンロージエ対チエリー、ギゾーなどの間に展開せられた論争の特徴としてフランス国家の起源、とりわけガリアにおけるフランス族の定着とその社会的、政治的影響に関する問題があり、いわゆる人種闘争理論、征服理論が中軸となつたことが注目される。またチエール、ミニエについては、そ

の歴史における必然性への見解が見逃がされ  
てはならないともされる。

第三章七月王政時代(上)——歴史学の組  
織と共和主義運動——、第四章七月王政時代  
(下)——ミシュレ史学——で扱われる七月  
王政時代は、前期の激しい政治抗争が七月革  
命になつて終りをつけ、王政復古派を攻撃し  
た歴史家たちの使命は果されたため、彼らの  
多くは實際政治家へと転身した。ギゾー、チ  
エール、バラントなどそれであるが、また彼  
ら、殊にギゾーになつて「歴史学を組織」す  
る努力が行われることが併せ注意されねばな  
らない。洵にそれは七月王国を飾るに相応し  
い事業でもあつたが、然し反面官製史学とは  
別に新しい方向に従つた革命研究も試みられ  
つつある。ラマルチーヌ、ミシュレ、ルイ・  
ブランなどそれであるが、著者はラマルチー  
ヌ、ルイ・ブランについては僅かに補説とし  
て紙幅を削ぐにとどめ、第四章の大半を特に  
ミシュレにあて、人間ミシュレの分析から進  
めて深くミシュレ史学の真髓に迫らうとす  
る。蓋しミシュレは、十九世紀フランスの代  
表的歴史家であり、強力な影響を与えたから  
である。

第五章第二帝政時代——批判的研究とトッ  
クヴィル——では、第二共和政時代を含めて  
考察されているが、優れた概説的叙述として  
の「フランス革命史」をもたなかつた。この  
時期も、フランス革命史学史上看過出来ない  
重要な時代であるとして、トククヴィルとキ  
ネーの作品について考察されている。殊にト  
ククヴィルについての論述は、ミシュレにつ  
いで可成り詳細にわたるものであるが、この  
期の革命研究に普遍的な特色は、革命への批  
判的態度であり、また傑出した革命史の概説  
の出なかつたのもポナバルティズムの独裁的  
支配に基づくことされる。

第六章第三共和政時代——とくにその成立  
期——は、主として、王政復活の危機を漸く  
脱して基礎が確立され始めた第三共和政成立  
期の革命研究について述べているが、ここで  
は当然、単なる歴史家というには余りにも大  
きな思想家テーヌに考察の焦点が注がれてい  
る。しかし著者は、今日のフランス革命研究  
はテーヌ批判から出発していると説き、オー  
ラルこそ革命研究に初めて科学的、客観的  
基礎を与えた人と認める。またこの時期の反  
テーヌ派にはアヴネル、ペレ、スブレなどがど

あげられるが、それらを体系的叙述にまでい  
たらしめたのには、革命勃発百年記念の到来  
と、それに伴う雑誌「フランス革命」の創  
刊、革命史講座の創設、フランス革命史学会  
の結成、革命史に関する根本史料の出版、世  
界博覧会の開催などが極めて大きな役割を果  
したとも注意される。

最後に著者は、このようにフランス革命研  
究は、その勃発から第三共和政の初期にいた  
る約百年を経て純粹に学問的研究の段階に到  
達することが出来たが、爾来今日迄六十年間  
の革命史研究についての詳細な研究は他日を  
期すとして、第七章を展望、副題を——オー  
ラル、ジョレス、マチエ——としてその各  
人に言及し、マチエをどのように乗り越えて  
いくかが今日フランス革命を研究するものに  
とつての最大課題ではなからうかと説いて本  
論の筆を擱いておられる。

本書にはなお附録として一、オーギュスタ  
ン・チエリー、二、フランソワ・ギゾーの二  
篇が添えられているが、吾々もまた展望に乗  
つて現代のフランス革命研究に身近かに触れ  
えたことを感じさせられる。  
ところで、私は先ず本書の内容紹介を試み

ながら、それは寧ろ目次の羅列に終つたようである。例えば著者が「歴史の洪水」期ともよばれた王政復古時代に乘出したフランス史學史、殊に革命研究史に注目すべき数多くの人達を、王政復古時代という共通の時期の人として扱えつつ、而もその間各人の特殊性が如何に美事に浮彫りにされているかが当然述べられるべきであつた。況や、著者自ら特に可成りの頁を削いたと告白しておられるミンユレやトックヴィルなどについては、いわば本書の庄巻をなすものだけに、一層そう痛感される。然し私が却つて意識的にさえそれを避けたかのようになつたのは、私には、著者のそれら個々人の差違追求よりは、かく異つた人達の歴史觀、なかならず革命史觀に対して終始一貫とられた理解の態度、すなわち史學史に対する方法論が何よりも関心をひき、またそれが本書の最も本質をなすと同時に、広く一般に歴史學の客觀性の限界、科學性とは何かの基本問題にも深くつながるものを含んでいると信じたからである。

今その論述に最も力を注がれた一、二を取上げるならば、著者はミシユレについて、『ミシユレの『フランス革命史』は、彼の數

多くの作品の中での傑作である」が、「ミシユレはその最後の頁につきのような言葉を書きしるしている。『いままでの革命史はすべて本質的に monarchique なものであつた。

ちから、コレージュ・ド・フランス教授を頂点とする七月王政時代における歴史家として

の本格的活動を經て、ナポレオン三世への忠誠拒否による田舎への隠退までの全生涯の詳細な叙述によつて見出さんとし、且つそれは甚だ説得力をもつて訴えているが、その際著者が、前第三章で分析している七月王政の性格、更に広くミシユレの歴史的背景、すなわち立憲君主派と共和派、上層ブルジョワと産業ブルジョワとの抗争の姿を常に念領におくことによつて、読者の理解はますます深められると期待していることいまでもない。

その主著「アンシャン・レジームと革命」は、彼自らの言葉に従えば「偏見なしに書いた」ものではあつたが、然し著者によれば、そこに「自由と平等、貴族と専門について、一方に貴族——自由——(貴族的)共和政(封建的・地方分権)、他方に君主政(絶対王政)——平等——專制(中央集権)」の図式化を試みうる彼の見解の中には、明かに「前者をいわば善きものとして高く、後者を悪しきものとして低く評價」し、従つて当然、アンシャン・レジームやフランス革命によつて喪われた自由を「回復するのは、ブルジョワ貴

「共和政である」との主張が認められる。而もそれは「貴族出身という生来の性格から由来する、いわば先天的なもので、終生かわることのなかつた彼の政治理論の特色であり」、「二月革命やルイ・ナポレオンのクーデタという現実の事件によつて一そう強化され」たものである。「その意味で、この書は、ナポレオン三世の支配に反対する行動」ともいえる。またその間見受けられる一見奇異な共和思想も、彼が「心からの共和主義者」としての発露ではなく、ただ二月革命の勃発に際して、「ブルジョワジーのための政権を、プロレタリアートの攻撃から守るための、ブルジョワ共和政に他ならない」ものであつた。すなわち著者は、ここで、トックヴィルが複雑な政治的色彩をおびつつ本質的にはあくまで貴族的保守主義者であつたことを綿密な検討によつて巧みに説明しているが、このような方法論は、他の何人に対しても、すなわち本書を通じて常に大きく貫かれているところであり、何よりもまず本書第一の特色をなすものである。

ところで、「史学史といへば、多くは……歴史家列伝的」か、「歴史思想史風のもので

あつた。しかし、……史学史も一つの歴史であるかぎり……もつと広く大きな視野から、把握し、叙述されなければならない。……わたしは、歴史家の個性、その時代の学問・思想・文化・政治・経済状態などを総合的にとらえ、それが歴史叙述にどのように結晶し、表現されているかをあきらかにしたいと考えた。而してこれをフランス革命史学史を中心課題とする本書についていへば、「単にいろいろな『フランス革命史』叙述だけをとりあげ、その特色をあきらかにするだけでは、不十分なのであつて、『フランス革命史』を書いた歴史家の個性や歴史学界の動向、その執筆の動機、その歴史家の時代のフランス革命像、さらに時代の政治状況（これはとくにフランスにおけるフランス革命史研究の場合には不可分なものであるが）などをば全体として考察しなければならぬ」と史学史——

フランス革命史研究に対決する自己の態度を明かにした著者の結論は、「フランス革命の叙述が、どのように歴史家が客観的であると主張しているにせよ、その時代の政治と密着しているものであるということ、いいかえる

と、いかに時代の政治に制約されているかということ」であつた。

いうまでもなく、それは歴史学の自立性を全く否認して政治の制約を説くものではあるまい。恐らくそれは、本書の中で著者が紹介している「意見のない *sans opinion*」歴史家は人間以上のものか、人間以下のものである。すべての革命史家は政治的色彩をもつていた。それがその著作に影響をおよぼした。……わたし自身も、わたしの『フランス革命政治史』で党派性をさげ、客観的であろうと努力したが、わたしが民主的・反教會的共和主義者であることを、そこで示しほめかさざるをえなかつた」ただ飽くまでも「氣をつければならないことは、政治的情熱になつて歴史家が事実を歪めたり、テクストを読み誤つたり、勝手な体系化をしないことである」とのオーラルの意味についてであること、疑を容れない。

思うに他の学者なら兎も角、歴史家自らが歴史学の客観性の限界、政治的制約を肯定することは、おのずから自己の歴史学の政治的性質を認めることであり、また現代政治への何らかの対決を迫られることにも繋がるもの

とて、多くは、少くとも自らは、意識的にさ  
えかかる問題介入を極力回避しようとするも  
のであつた。然し恐らくそれは、歴史学の真  
に正しい発展に寄与するものではあるまい。

蓋し歴史学は過去と現在の総合科学である  
からであるが、またそれは、著者が多大の共  
感を示されたテエリーのいう「この世の中  
には物質的享楽よりも、財産よりも、健康そ  
のよりも、より良き何ものかがある。……

すなわち学問への献身的態度をまつて初めて  
可能であろう。私は、著者が更に他日を期さ  
んとされつつある二十世紀のフランス革命史  
研究においても、ますます鋭利な分析、ひた

むきな歴史への献身をもつて、吾々を啓發さ  
れんこと多大なるを切に希むとともに、その  
感功を信じて疑わない。これ偏へに、私に

は、二十世紀に入つて、フランス革命の諸研  
究は科学性を一層深めたため、その制約性を  
説明することは更に容易なことではないと思

われるだけに、より強い興味をそそれれ、研  
究の意義また一入と考えられると同時に、そ  
の可能を、既に展望のオーラル、ジョレ

からである。

著者は、各時期の歴史家の論著理解に際し  
て、必ず各章の劈頭に、それぞれの時期の基  
本的な歴史過程をまず述べられた。著者の立  
場として当然の論述の運びといえる。著者は

また、まえがきで提起されたわが国の西洋史  
研究のあり方についての疑義に対しても、そ  
れが打解の道として史学史研究を選ばれ、確  
信をえられたようであるが、確かに賢明な態  
度といえる。更に著者は、史学史の研究で

は、従来あまり問題にされなかつた学界の諸  
事情をも十分に考慮しなければならぬといも  
教えている。その周到さを学ぶべきである。

わが国における西洋史研究の特殊性は、た  
だ根本史料の致命的な不足にのみ由来するの  
か。若し仮にそうとしても、それが打解策は

史学史研究によつてだけ講じうるものなのか  
については、疑問を抱く人もあろう。然し本  
書の何よりの特色、いな生命ともいふべき特

質が、歴史学の制約性、政治的性格への史的  
追求である以上、私の関心も、多くそこに惹  
かれざるをえなかつた。素より、著者が歴史  
学の限界性をフランス革命研究史を通して探

究されようとするに、何の疑義あるべき  
筈はない。然し、著者が史学史を、「歴史家

の個性、その時代の学問・思想・文化・政治  
・経済状態など」の総合によつてとらえんと  
する態度、更にいえば総合の仕方そのものに  
も問題は全くないのであろうか。著者はまた、

「ひろく当時の社会・経済・政治・階級およ  
び世界観などと結びつけて総合的に把握され  
ねばならない」とも説き、総合さるべき諸要  
素について更に詳細な分析、叙述にあつて

は細心に言及されているばかりか、いわゆる  
政治史観の如きは片鱗だに見受けられないけ  
れども、その間、なお且つ政治的制約、政治

性そのものに対する今一層の深い掘り下げに  
よる重厚な総合的把握に何かしら欠けたるに  
力弱さを覚えるのは、私の理解の到らなさに

のみよるのであろうか。  
それにしても、戦後の滔々たる社会経済史  
研究の流行の中にあつて、なお一歩前進して

歴史の全像に迫るべく、未開拓に近い上部構  
造、殊に至難な史学に究明のメスを入れん  
とし、且つ先の著「フランス史学」を大きく  
踏み越えて、ここに二十年余に互る研鑽の成

果として、著者自ら、「わが国ではもちろ  
ん、フランスをはじめ、諸外国でもまだなさ

れていない」と強く自負しうるような、極めて明快な論理と整然たる体系をもつ大著「フランス革命史研究——史学史的考察——」を世に問われるにいたつたことは、ただただ敬服のほかなく、教示されるどころ、また多大

なるものがあつた。歴史を志す者ごとく、の必読の書として、敢えて推薦して已まな

い。(A5、三四九頁、他に、まえがき、参考文献、人名索引、定価七百円、創文社)

——西井克己——

## 会 報

京都大学文学部創設五十周年記念特別例会及び十二月例会の予定は次の通りです。多数の御参会をお待ちしております。

一、京大文学部創設五十周年記念特別例会

日 時 十一月二十四日(土) 午後一時

場 所 京大法経第六教室

日本史 雑戸の労役について

東洋史 六朝時代の社会と宗教

西洋史 小ブリニウスのピテイニア総督としての使命に就て

地理学 礪波の散村

考古学 飛騨高地の縄文式石器について

一、十二月例会

日 時 十二月一日(土) 午後一時

場 所 京大文学部第八教室

明代中期の北方政策

ホルスの諸像

近時出土の中国古銅器について

広島大 福尾猛市郎氏

岡山大 宮川 尚志氏

名 大 水川 温二氏

大阪市大 村松 繁樹氏

名 大 澄田 正一氏

萩原 淳平氏

加藤 一朗氏

岡田芳三郎氏

## 執筆者紹介

原 随園 京都大学教授

村上嘉実 滋賀短期大学教授

赤松俊秀 京都大学教授

辻田右左男 奈良女子大学教授

柴田 実 京都大学教授

山本四郎 華頂女子高校教諭

岡崎 敬 京都大学人文科学研究所助手

川口 博 京都大学大学院学生

西井克己 会沢大学教授